

中世城郭都市の形成

日欧インカステラメントの比較考古学

A Formation of a Medieval Castle Town

千田嘉博

はじめに

- ① 日本中世における城郭集落の形成
- ② ドイツにおける城郭集落の形成
- ③ イギリスにおける城郭集落の形成
- ④ 城郭都市形成の歴史的位置

【論文要旨】

日本中世では13世紀以降に各地で村落形態が集村化していったことが、考古学的に明らかにされている。従来そうした研究は、集落形態に分析の比重があり、城郭との関わりについては分析してこなかった。しかし16世紀にかけた日本の村落の集村化は、多くは城郭を核としたもので、集落プランの凝集に果たした城郭の役割を正しく評価することが必要である。

城郭を核にした集落の凝集（集村化・都市化）は、日本だけのことではない。ヨーロッパ中世においても11世紀を中心に各地で同様の変化が観察できる。最初にこの変化の意義を指摘したトゥベールは、インカステラメント＝城郭都市形成と呼んだ。しかし、こうした集落の変化はアルプス以南に特徴的なものとされ、アルプス以北では重要視していない。こうしたヨーロッパの研究に、現地調査の成果から再検討を加えるとともに、ヨーロッパとの比較によって、日本の城郭集落の特質を捉えるのが目的である。

そこで本稿では、日本での城郭集落形成の分析から、インカステラメントには、村落型と都市型の2形態があることを指摘した。そして、日本では村落型、ついで都市型のインカステラメントを行ったのに対し、ドイツでは都市型に偏し、イギリスでは日本同様の2つの城郭集落形成があったことを明らかにした。ドイツ・イギリスでは土づくりの最終段階である11世紀の城の再評価によって外郭（前城）がもった初源都市としての機能を重視した。こうした検討を通じて、中世の城郭集落の日欧それぞれの特徴と、城郭集落が日欧で共通してもった過渡的で初源的な中世都市としての性格を明らかにした。

日本のこれまでの研究は、村落と都市を区分して検討を進めてきたが、地域における中心地（都市）の形成といった視点から分析をすることで、村と都市を横断的に検討し、両者の関わりの変化をたどり、考古学的成果による地域の中心地形成史を明らかにすることが可能になる。こうした試みは個別都市の復原に留まらない、中世都市研究の新しい視角を提供できると思われる。

はじめに

本稿の目的は、日本とヨーロッパ中世の社会で広く確認される、小城郭を核とした凝集的な集落の形成を比較することで、城郭を核とした集住化の果たした意義を検討することにある。凝集的な集落とは集村形態の村落および都市を指す。

分析の素材は多方面にわたるが、まず城郭と集落の関係の考古学的研究を中心に整理を行う。日欧とも中世の城郭に関する研究はそれぞれ多様な方法で行われている。城郭の研究では、まず、城郭の分布や構造の特色を遺跡からさぐるものが基礎になる。日本では17・18世紀から、城郭の設計法や攻防の戦術が研究され、近代以降は軍による築城史研究や民間学の縄張り研究として城郭を調べてきた。

ヨーロッパでも19世紀以降には現在見ても遜色ない、みごとな城郭の略測量図（いわゆる日本という「縄張り図」）が作成された。これらによって城郭の分布や地域性、構造などが明らかにされてきた。こうした研究は、城郭を素材とした歴史研究の基本となるものであり、今後も日欧で活発に続けられるであろう [大類・鳥羽 1936, 村田 1987, PIPER 1912, ANTONOW 1993, FRIEDRICH 1994]。

しかしヨーロッパにおいては第二次世界大戦後から、日本においては1979年の村田修三の提唱から [村田 1979]、城郭を歴史研究の資料として活用する新しい研究の視点が加わった。この結果、日本では都市・村と城郭をめぐる研究は大きく進歩した [前川 1991・千田 1991a]。

また中世の考古学の進展は、発掘の成果にもとづく村落形成史の研究を押し進めることになった。特に、散村から集村への展開を視点にした原口正三、広瀬和雄らの研究は、古代から中世の村落変化を具体的な形で指し示すことに成功した [原口 1977, 広瀬 1986]。一方、歴史地理学の分野では、金田章裕が耕地編成との関わりを含めて、古代と中世を見通した総合的な研究を行った [金田 1985・1993]。

いずれもすぐれた研究で、本研究もそうした先学に導かれたものであるが、集落の変化と城郭の関係、あるいはさらに積極的に、城郭が集落の凝集化に果たした意義を明らかにすることは、なお日本では充分でないとしなければならない。さらに村落と都市を区分して考えたため、それらの相互関係をつかんだとはいいがたい。

それではヨーロッパでの研究はどうか。ヨーロッパの研究動向は城戸照子が的確にまとめて紹介している [城戸 1990・1995]。それによれば、1973年のトゥベールのイタリア中部に関する研究こそが、城と地域の中心集落形成の関わりを読み解く上で画期的な意味をもったという [TOUBERT 1973]。

トゥベールは、大都市に偏った研究の限界を指摘し、中世都市の圧倒的多数は小都市（未熟都市・半都市）であり、それを把握してどのように評価するかが問題だとした。そして、これまでのように都市と村落をあらかじめ区分して研究を進めるのではなく、地域の多様な諸集落の相互関係を、ひとつのシステムとして捉え、そのなかで、それぞれの集落が発揮した機能を分析することが必要だとした。そして、ある一定の地域のなかで、政治・経済・宗教・文化といった中心地機能を発揮した集落が「都市」である、とする。そしてイタリア南部を舞台に、11・12世紀に城郭を核とした

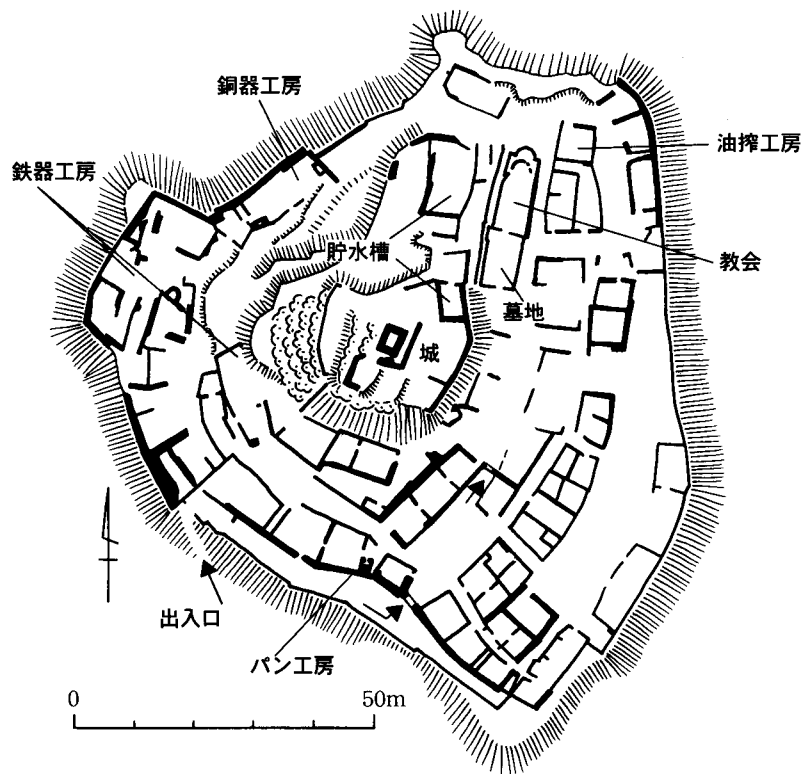


図1 ロカ サンシルベストロ([FRANCOVICH et al. 1995]より作図)

小規模な城郭都市が一斉に出現し、地域の中心地機能が大きく変貌したことを明らかにした。こうした城郭を核とした中心地形成をトゥベールは、インカステラメント (incastellamento) と規定し、当該期を特徴づける都市形成の方法だとした。

こうした考え方は集落形成の核としての役割を果たした城館の意味を問うことで、都市化における領主権力の再評価をももたらすという。都市の主役を封建制の制約から相対的に自由であった市民共同体としてきた、従来の都市史研究を見直すことになった。さらに個別都市の内部の問題に加え、地域のなかの中心地機能の役割を検討することは、ある地域のなかで都市的機能をどのように継承し、都市移転やプランの変貌を経て今日に至る都市をどうつくってきたのかを追求することが、重要な課題となったことを意味する。

具体的にはどのようなものをインカステラメントと呼ぶのであろうか。まずヨーロッパにおけるインカステラメントの典型例を確認しておこう (図1)。イタリアの小規模な城郭都市・ロカ サンシルベストロは11世紀以降に城を核にして、土器職人・パン職人・鍛冶職人・教会僧など、さまざまな商人や職能人が集住して、地域の中心地機能を発揮した [FRANCOVICH et al. 1995]。こうした様相はまさにトゥベールのいうインカステラメントの典型的事例といえ、指標となる。

つまり、村と都市をひとつづきのものとして考え、城と都市機能を関連させて検討することで、中世初期から盛期の城郭を集落形成の核としてとらえ、地域の社会経済活動に果たした城郭の役割を解明する新しい視角を生み出したのである。日本では先述したように、こうした横断的な作業に

よって、中世の集落形成あるいは中心地形成を、城郭と関わらせた研究はない。そこでトゥーバールを嚆矢とした新しい研究視点を、日本中世の考古学的な城郭と集落の研究に取り入れて分析を進めていきたい。

「インカステラメント」はすでにヨーロッパでは定着した学術用語である。本稿では、城郭を核とした都市や村落の凝集化の運動を城郭集落の形成と呼ぶ。インカステラメントの視点は、村落と都市をひとつづきに検討する横断的な分析視角である。次章以降に述べるように、当然そうした動きは村落の編成においても、都市の編成においても確認できる。そこで中世集落のインカステラメント運動全体については城郭集落の形成と呼び、そのなかの都市化を明確に押し進めたインカステラメントを、城郭都市の形成と呼んで特に区別する。

城郭と村・都市の動きを横断的に比較・検討して、各地のインカステラメントの特質を明らかにするのに重要な点は、地域の村落と都市の形成を峻別して検討するのではないことである。そこで地域における中心地の形成を段階的に把握し、初源的な城郭都市の形成過程に注目したい。また城を核にした村の集村化と初源的な都市との連関についても留意する。

また、アルプス以北のヨーロッパにおける城郭集落の形成については、特に村落編成に関して否定的な見解が強い。しかし城郭都市が12世紀以降の本格的な中世都市の成立に果たした過渡的な役割を否定すべきではないと思われる。ヨーロッパにおける土づくり最終段階の城郭研究の遅れが、適切な評価を阻んできた要因であろう。これについては現地調査にもとづく成果をもとに、具体例をかかげて検討を行うことにする。

①……………日本中世における城郭集落の形成

1 村落型 インカステラメント

日本中世においても南欧と同じようなインカステラメントを確認することはできるであろうか。ここでは、まず本州島の中央に位置する尾張平野を例に検討したい。現在の尾張平野の中心都市は人口200万人を越える名古屋であるが、これは1610年から建設された城下町で、それ以前は名古屋の北西5kmの清須城下町が最大の中心地であった。

1988年の清須シンポジウムの佐藤公保の報告によって清須周辺の村落の動向を概観しよう〔佐藤1989〕。清須周辺では7ヶ所の中世の廃村遺跡が発掘されている。確認された村のうちもっとも早いものは11世紀半ばに起源があり、存続期間が半世紀ほどの派生村落をのぞけば、14世紀から15世紀半ばにかけて5つの村が安定して活動した(表1)。14世紀初頭は、古代からの庄園・国衙領体制が崩壊した転換期と考えられており、遺跡で確認される村の活発な展開は、新たな「村」体制の成立に関わると見てよい。

それは水田などの耕地の編成からもうかがえる。村周辺の低地に広く観察される条里地割、方形に区画された水田も奈良時代に最初に敷設されていたが、そのまま14世紀に受け継がれたのではなかった。これらの村が成立してきた14世紀から15世紀にかけて、従来とは方位の異なる中世条里が改めてつけ直されたことが、一連の中世廃村の調査で判明している。14世紀の新しい村体制の成立は、地域の耕地システム全体の再編成と新たな開拓に裏打ちされていたと見るべきである。

表1 清須城下町と周辺村落の消長
 ([佐藤 1989]より)

遺跡	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀
朝日遺跡				■			
朝日西遺跡	■	■	■	■		■	
上田遺跡		■	■	■			
森南遺跡				■			
阿弥陀寺遺跡			■	■			
大淵遺跡			■				
清須城下町						■	■

16-17世紀の朝日西遺跡は清須城下町総構え内の都市で、清須城下町遺跡の一部。

中世の農耕技術の変化について石尾和仁は、鎌倉中期以降に特定階層が限定的に用いていた牛馬耕の一般への広がりを指摘し、この牛馬耕の普及が湿田から乾田への変化を可能にし、それが集村化の原因となったとする [石尾 1993]。農耕の高度な集約化が、先に見た集落の再編の前提を形成したと、やはり考えてよいだろう。

また、14世紀には地主・名主などの上層民と寺僧が協力して村の意志決定に当たっていることが指摘されており [上村 1979]、村落共同体の機能にも大きな変化が認められる。こうした村落再編に伴う生産力の向上と村落共同体の強化は、ヨーロッパにおいて10世紀後半から12世紀半ばの、三圃制農法の普及と村落共同体の結成が、その後の中世都市の広範な成立の前提をつくりだしたこと、と対比して把握することが可能である。清須周辺の村々は水田と島畑の耕作を経済的基盤にし、河川の自然堤防などの微高地上に立地した。集落における屋敷の配置は基本的に条里地割に従ったが、高燥な場所が選択できれば、周辺の水田とは異なった、高燥地に合わせた方位で集落を形成した。それらの村には特に堀を巡らすなどの防御施設は認められない。森南遺跡は集落南側の微高地の下に大溝が検出されており、堀の可能性も示唆されているが [加藤 1990]、地籍図と航空写真の判読では、大溝が村を囲んだとは考えられず、用水ととらえるべきである。

ところが15世紀後半にはこれらの村々は突然、廃絶してしまう。こうした村落再編の原因と考えられるのが、1478年に清須城が守護斯波氏の居城となって、城とその城下が大きく改修されたことである。発掘調査でもこの時期に周辺の村落遺跡の廃絶と対照的に、清須城下町が活動を始めたことが確認される。

つまり、清須城を守護の居所とし、城下を整えるのに際して、半径約2kmの範囲の村落が城下域と一体化し、大きな拠点集落の一部を形成した、と考えられるのである。しかしこの城を核とした村落再編が、都市清須の商工業機能の強化に直接、寄与したのではない。なぜなら、それぞれの廃村の調査では、商業はもちろん工業に関わる遺物や遺構は検出されておらず、住人の生業は農耕であったことが明らかだからである。

ドイツでは中世に3000の都市があったとされるが、このうち人口100人~1000人未満の小都市が、

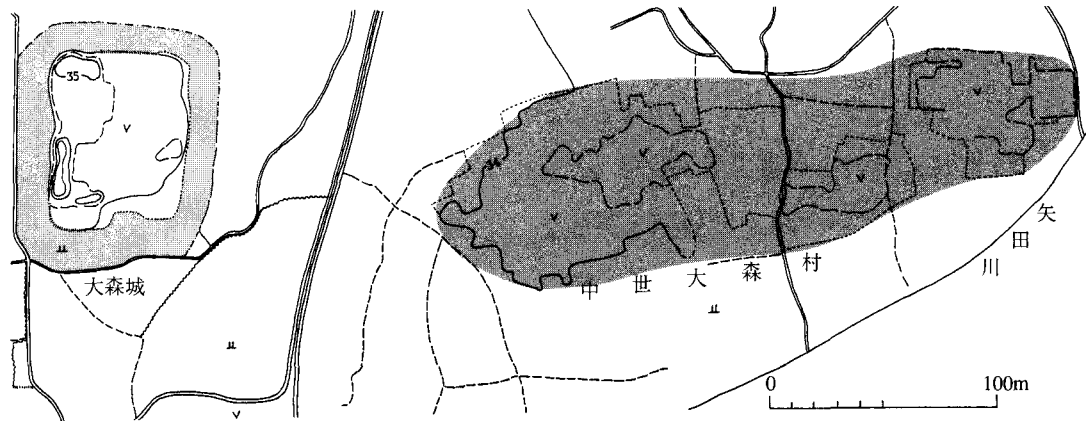


図2 大森城と大森村(1962年守山市測量図より作成)

大多数の2800カ所を占めたという。こうした小都市では集落の住人の多くは半農半工の状態であった〔鯖田 1994〕。また人口5000人を越えたと考えられるフランクフルトでも、市壁内に農地があり、また一定の農民が都市住民として生活し、市壁外の農地を耕作していた。

清須の場合も城を核とした商工業者の集住だけでなく、農耕を主体とした村の移動と凝集も行われていたのである。村落移転による城下凝集によって、周辺に散在していた村の家屋がまとまり、より集約化した農業が実現された。また都市部への集住は農産物の売買を一層有利にしたに違いない。そして無防備な村に暮らすより、戦いによる略奪の危険を減らすことができたであろう。このように考えれば、広範な村の移転は必ずしも領主側の上からの強制によって行われた、と考える必要はない。領主側・商工人・農民の利害が最終的に一致したからこそ、凝集が実現したのである。

こうした城を核とした村の凝集化は尾張平野において14世紀以降、広く確認できる。たとえば、現在の名古屋市守山区に所在する大森尾関ヶ城は、14世紀頃に尾関氏が創築し、城主が替わりながら16世紀半ばまで機能した、と考えられる。注目されるのは城の東側に元郷と呼ばれる畑地が1962年の測量図で広がっていることで、この畑地こそ、中世に大森村が所在した場所であった(図2)。尾関氏は矢田川に面した大森一帯の開発領主としての性格を強くもち、居城を核にしたインカステラメントを強力に押し進めたのであろう。

この元郷からは南の矢田川を越えた猪子石などに枝村を分出したとされ、元郷に所在した正宗庵(正法寺)が枝村の人々の檀家寺であったという。さらに元郷には氏神として八剣神社を祀った〔小林 1980〕。城を核とした元郷の大森村は、周辺村落の人びとの宗教センターとしての役割を果たしていたのである。このことはヨーロッパにおけるインカステラメントで中心的な宗教施設が建設されたことと共通する。

大森では城主に直属した職人は一定度存在したと思われるが、中心地機能は低く、市場地名から推測される定期市が、元郷の商業活動の中心であった。元郷から2 km 西の小幡城と4 km 西の守山城の城下がこの地域のより高次の中心地機能を発揮した。

清須・大森で確認したように尾張では14世紀～16世紀前半にかけて、続々と平地の城が成立し、城を核とした村の再編が展開していった。尾張における中世の城郭は384カ所確認されているが、

その大多数がこうした動きの中でつくられたものであった。つまり清須のような、その後尾張といった国レベルの中心地になっていった限られた場所だけでなく、ごく一般的な村落において広く城を核としたインカステラメントを行っていたのである。

そして、こうした運動は尾張だけでなく、度合いの差はあるものの、全国に共通した動きと捉えられる。これを日本における第1次のインカステラメント・「村落型インカステラメント」と位置づけ評価する。そこで各地の状況を概観して、日本の村落型インカステラメントのバリエーションを確認しよう。千葉県ではこの時期、尾張で見たような館城を核として周辺に村が凝集するというインカステラメントだけでなく、低丘陵上の領主館と周辺の村をひとつづきの堀や土塁で防御し、あるいは丘陵斜面に雛壇状に形成した段に村落民の住居が連なる、といった館-村一体防御型の村が出現していた。代表例は光町の笹本城、木更津市の笹子城である [東総文化財センター 1995]。

これらは一見、城そのものに見えるが、実は城を核とした村落型インカステラメントにほかならなかった。領主側と一般村落民との相互関係の差異が乏しいことが、このような形態のインカステラメントとして表れたのである [千田 1996]。それは出土遺物の各地点の均質さからも証明される [小野 1995]。そして注目すべきは、このタイプの城郭村は、15世紀後半～16世紀前半に廃絶し、かわって台地・丘陵上の城を核とし、丘陵・台地斜面部や、裾部の低地に村が凝集するタイプへ収斂していったことである。

それらは、基本的に尾張で確認したインカステラメントと同じ形態であり、領主権力の成熟に伴って、再度インカステラメントが行われた結果、と考えられる。こうした千葉の例を前提として、たとえば青森県浪岡町の浪岡城・あるいは鹿児島県知覧町の知覧城のような^{なてやしきがた}館屋敷型の城を考えると、城-村一体防御型の村インカステラメントがより大規模に、かつ16世紀末から17世紀初頭という新しい時期まで連続してつづけられた、と評価することができる。

この地域では、先にふれたように領主権力側の相対的な弱さを指摘することができ、島津氏などを中心に南九州では多くの半農半商工民に、領主がきわめて少ないながら禄を給することで、彼らを武士身分へ取り込み、編成することをしており、城-村一体防御型インカステラメント（館屋敷型城郭の成立）は、そうした社会編成を反映した、と別言できる。

九州北部の佐賀平野では、13世紀～14世紀に内海に面した低地の埋め立てと新田開発が小規模な封建領主や有力農民を主体に進められ、14世紀には有力農民の館を核とした集村が行われるようになっていた。16世紀代には、こうした村落が2つのパターンに進化した（図3）。

村落上層が封建領主として武士化した村落では、中心に埋め立てと拡張をくり返して完成した立派な堀をめぐらした館城があり、周囲に階層性をもった住民の宅地を配置した。姉川城がその典型である。一方、こうした核となった村落上層の封建領主化がさほど進まなかった村では、ゆるやかな階層性をもつにとどまった堀囲みの屋敷地群といった景観となった。上六丁遺跡などが代表である。いずれの場合も、商業機能はほとんどたなかったが、寺社の集中から宗教センターとしては一定の機能を果たした、と考えられる [宮武 1995・河野 1996]。

中世でもっとも先進的な地域であった畿内では、領主と村共同体との関係の違いによって、多様な形態の村落型インカステラメントを行っていた。他の地域よりも一足早く12世紀末には、大阪府長原遺跡のように堀をめぐらした館が出現し、13世紀後半には村の集村化をはじめていた。14世紀

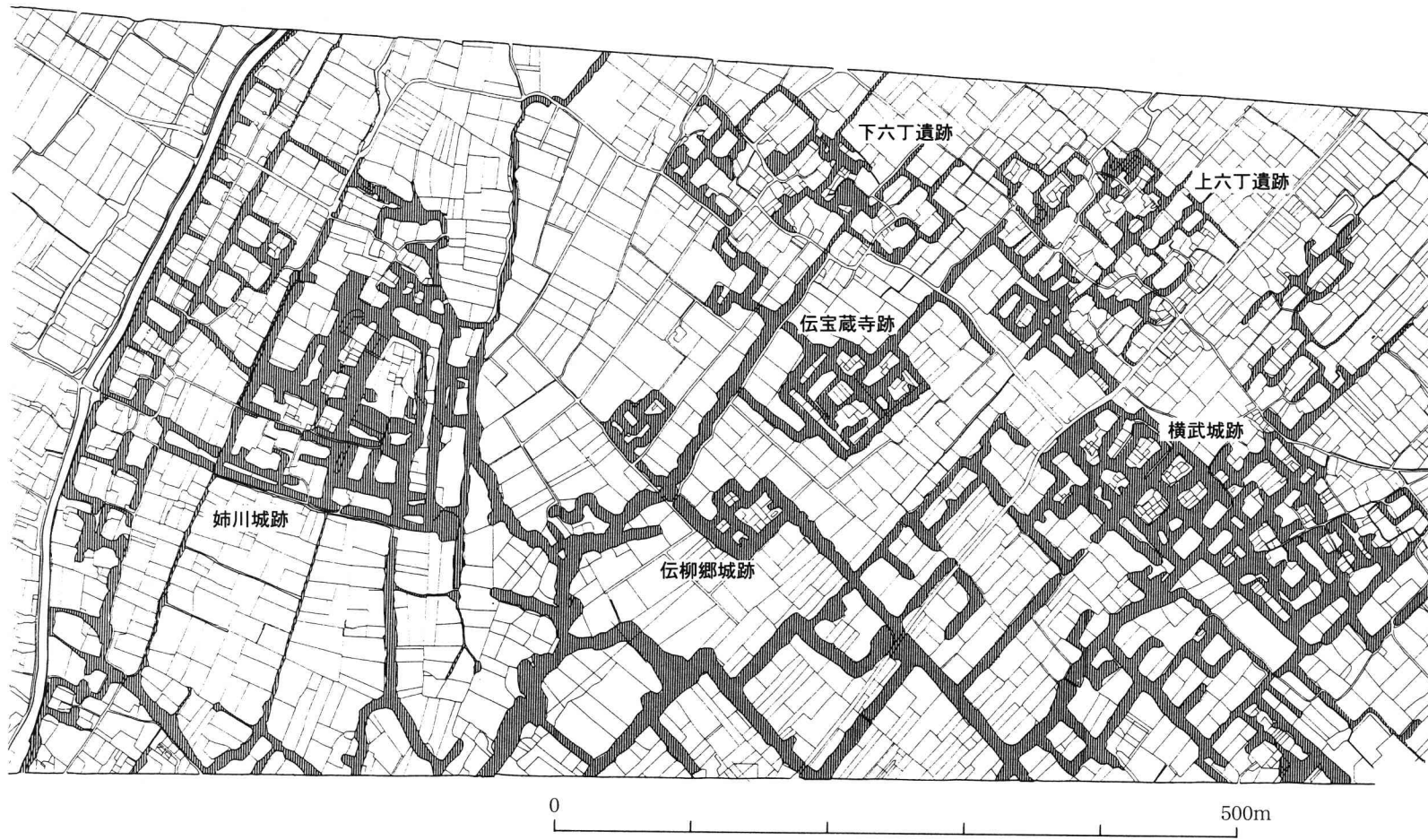


図3 佐賀平野の城郭集落（〔河野 1996〕所収図に加筆）

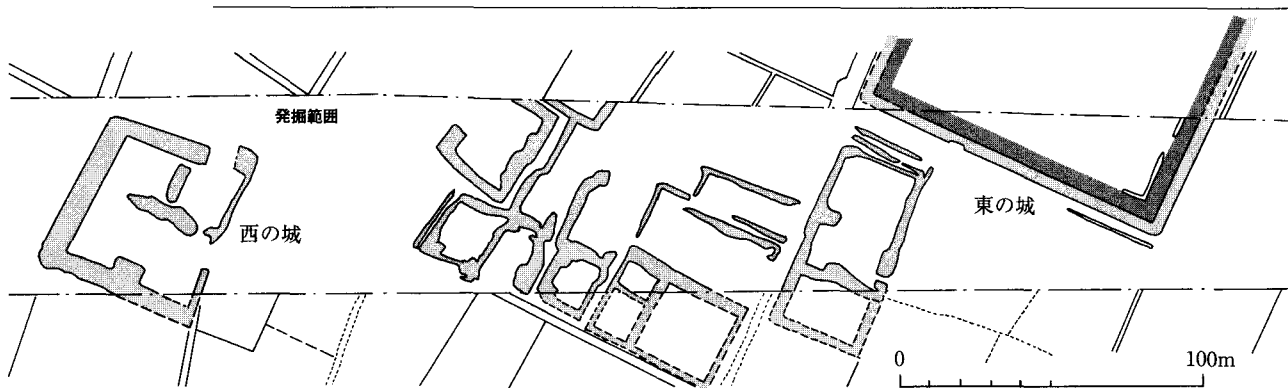


図4 日置荘遺跡([鋤柄ほか 1995]より作図)

後半には、大阪府日置荘遺跡のように約2町隔てて並立した館を核に、溝囲みの屋敷群として村を編成しており、鑄造工人といった職能民を含んだ明らかなインカステラメントを見ることができる(図4)[鋤柄ほか 1995]。

滋賀では13世紀を境にして村の再編と堀囲い集落が出現していったが[木戸 1992]、核となったのは堀に囲まれた村落上層の屋敷だけではなく、中世後期を含め寺院を中心とした事例が指摘できる。堀や土塁をめぐる寺院もインカステラメントの核であった。中世後期には強力な村落支配を実現した領主の村では核となる城郭が明確で、村落内にひとつだけ存在したが、村落内の有力者の連合によって村の自治が行われていった場合には、多くの並列的な館城がいくつも村の中に築かれた。それぞれの村落型インカステラメントの行き着いた姿を示すものといえる[千田 1991b]。

2 都市型 インカステラメント

村落型インカステラメントにつづいて列島をつつむ大きな動きになったのが、都市型インカステラメントであった。周防の守護大内氏の城下町・山口では、応仁の乱を経て守護が在国するようになる15世紀初頭に、守護の居城が造営されたのが確認され、16世紀初頭には城の周辺に城下が稠密に形成されたことがわかってきた[古賀 1994]。守護や守護代の居城に囲い込まれていた工人などが、城下で活動しはじめたことが考えられる。

美濃では革手城が守護所であった。16世紀代にはかなり広範囲にわたって都市域が形成されたことが土師皿の分布から推測される[高田・内堀 1994]。16世紀後半以降、守護所は革手→福光→枝広→大桑→稲葉山城下(岐阜)と移転し、城を核とした武士と商工業者の移住を繰り返しながら、それらの凝集度を一層高めていった。実際に稲葉山(岐阜)城下には、大桑町など、稲葉山(岐阜)城下の前身都市の町地名があり、商工業者が移り住んだことがわかる[小島・千田 1994]。

15~16世紀の都市型インカステラメントの事例は枚挙にいとまがない。注目すべきは、こうした城を核とした中心地機能の凝集化に、いくつかの画期があることである。まず15世紀の守護城下町の段階があげられる。この段階では城下町は政治的には重要な機能を発揮していたが、経済的機能では地域の中の有力な門前町や港町におよんでいなかった。

つぎに16世紀初頭の守護城下町の拡充段階があった。先に見た、農村インカステラメントによる農村再編が、城を核とした都市の編成に強い影響を与えた結果である。さらに16世紀半ば頃の戦国期城下町成立段階が指摘できる。この時期は大名の拠点城郭が居住・政治機能をもった山城もしくは

は曲輪構成が重層化した平地城郭へいっせいに移動した時期である [千田 1994]。城下もしいだいに城を核にした身分別の住み分けを志向していった。

最後の画期が16世紀末～17世紀初頭の段階である。この時期に城下町が中心地として門前町などの他の都市的空間を圧倒し、それぞれの地域で基本的に第1の中心地機能を確認するとともに、農業・漁業などの従事者が農・漁村に居住し、武士・商工業者が都市に居住する身分別の住み分けが完成した。ここに現代につづく日本の都市-村落景観の基本が確立したのであった。

こうして完成した日本の近世城下町は原則として、幕府から認められた大名の居所を頂点に、ついで大名の一族・重臣層、一般武士、さらに下級武士、町人といった身分別住み分けを厳格に空間に反映した点に特色がある。具体的には城郭の本丸を頂点とした求心的な設計を城下まで敷衍することによって、そうした特徴的な都市プランをつくっていた [千田 1996]。

ここで概観してきたように、15世紀後半～17世紀初頭の日本における都市形成はいくつかの段階に細分化できるものの、一貫して城郭が都市的空間の形成と凝集の最も重要で広範な核となった。この100余年にわたった一連の動きを日本の第2次インカステラメント、別言すれば「都市型インカステラメント」と名付けてよいだろう。

ヨーロッパにおいても南欧と中欧ではインカステラメントのあり方や年代が異なることが指摘されている。日本においては14世紀以降に城郭集落の形成が明確化し、まず村落型インカステラメントが、ついで都市型インカステラメントが行われて、列島の政治・経済・流通のネットワークができあがったのであった。

このように日本では、南欧とも中欧とも異なる、2段階の城郭集落形成-インカステラメント-が行われた、と評価できるのである。

②……………ドイツにおける城郭集落の形成

日本における2段階インカステラメントを視点として、従来城郭集落の形成がほとんど見あたらない、と評価されてきたドイツの再検討を試みたい。バイエルン州に属すローテンブルク オブ デア タウバー (Rotenburg ob der Tauber) とその周辺地域を事例にする。

ローテンブルクは、中世の町並みが大規模に復原された世界的に有名な観光地である。もちろん中世そのものではないにせよ、わたしたちは中世的都市空間の片鱗を体験することができる。この町が大きく成長した契機には、1172年に皇帝バルバロッサが都市特権を認め、1274年にハプスブルグ家のルードルフ1世が帝国自由都市の特権を与えたことがあげられてきた。ここでは周辺の都市的な場や城郭の消長とローテンブルク成立の関係に注目して、考古学的に都市の成立を考えたい。

10世紀にタウバー川の断崖の上に小さな教会がつくられ、11世紀にその場所に城が築かれたことが、ローテンブルクのはじまりとされる。12世紀に城は拡張され、考古学的には部分的にしか確認されていないが、その頃には城の前に都市的空間がかなり大規模に形成されていたと推測されている。12世紀の都市特権の認定も都市の形成に一層の拍車をかけたに違いない。

さてローテンブルク周辺で、中世までに築かれた城郭は16ヶ所知られている [DANNHEIMER・HERRMANN 1968]。このうち13ヶ所はごく小規模な館で、ある時点では小地域開拓の拠点であった

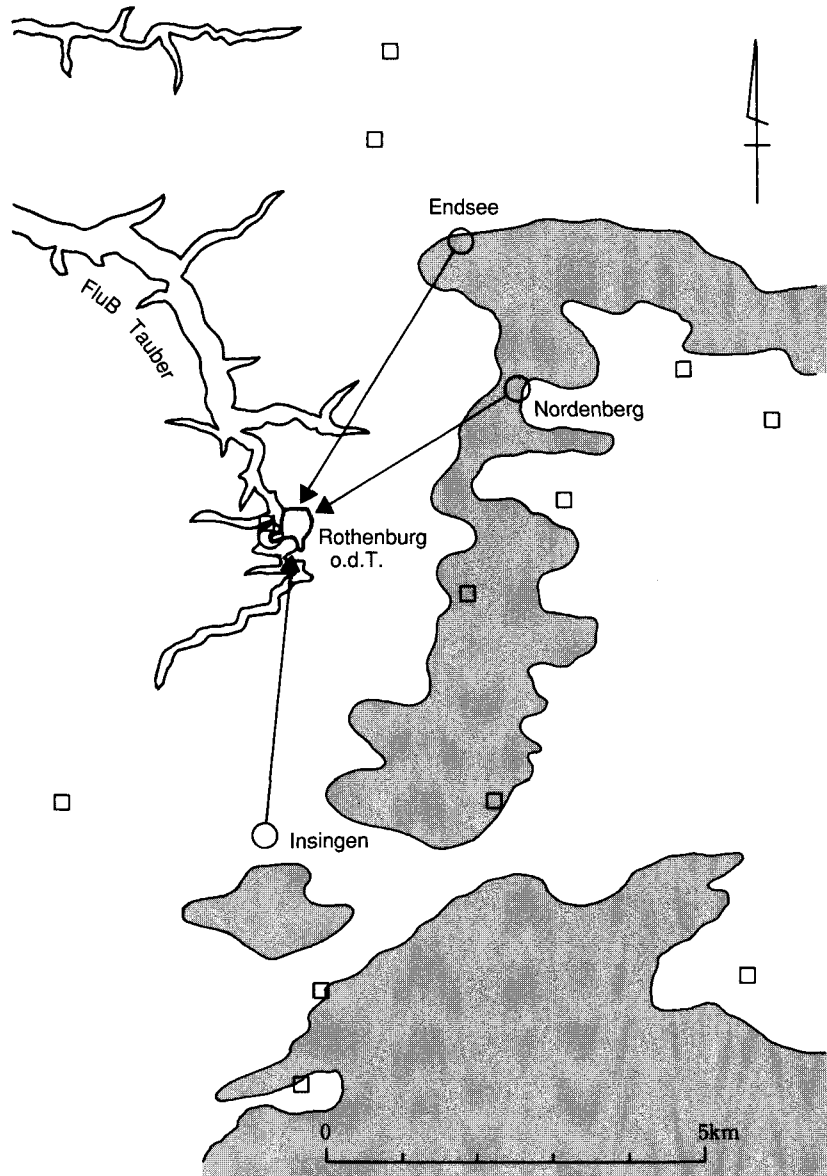


図5 ローテンブルク周辺の城郭分布図
 ○本城と外郭をもつ大型城郭 □小規模館

と思われるが、村落型インカステラメントの核になった痕跡は見あたらず、またこの地域に数多く存在する村から見れば、そうした館がある村の方が少数派ですらある（図5）。

ドイツ各地の中世村落の成立と展開を、歴史地理学の立場から詳細な現地調査と文献史料によって分析した水津一郎の研究でも、村落の形成過程において城郭が核となった例はまったくふれられていない [水津 1976]。またドイツの中世考古学を概説したフェーリングも村落と城郭の関係についてはまったく注目していない [FEHRING 1992]。

やはりローテンブルク周辺の状況はドイツのごく一般的な事例と見てよいだろう。こうしたことから従来も指摘されてきたように、ドイツでは村落型インカステラメントが広範に行われた、と考

えることはできない。

ただしローテンブルク周辺に残された3つの中世城郭には注意が必要である。エンドゼーのアルテスシュロス(Endsee/Altes Schlos), ノルデンベルグのシュロスビュック(Nordenberg/Schlossbück), インシンゲン(Insingen)の3城は, それら以外の中世城郭より規模がずばぬけて大きく, 構造に共通性をもった。とりわけエンドゼー城とノルデンベルグ城は類似しており, 本城部分(Kernburg・実城)に外郭(Vorburg・前城)をつなぎ合わせた構造になっていたのである(図6)。3城のうち, 比較的城の歴史がわかるエンドゼーの場合, 11世紀にはエントセ家(Herrn von ENTSE)の城として使用されていた。しかし12世紀の初頭に城主は別の場所に屋敷を築いて移り住んでしまい, 城としての盛期をはずれてしまう。さらに城主一族は最後にローテンブルクへ引っ越した。そして1408年に周辺の城と共にエンドゼーの城は破却された。

こうした歴史的背景から, 今日見ることができるエンドゼーの城の構造は, 11世紀末から12世紀初頭のものである可能性が高く, 何度か行われた発掘の成果とも矛盾しない。城の大部分が土の堀や切岸で防御しており, 中心部に部分的に石造りの塔があるという遺構のあり方も, そうした年代観に一致する。構造が酷似するノルデンベルグやインシンゲンの城も, 遺構から同様の年代を推定をすることが許されるだろう。また, この時期にローテンブルクにあった城も, 共通した構造だったと考えられる。

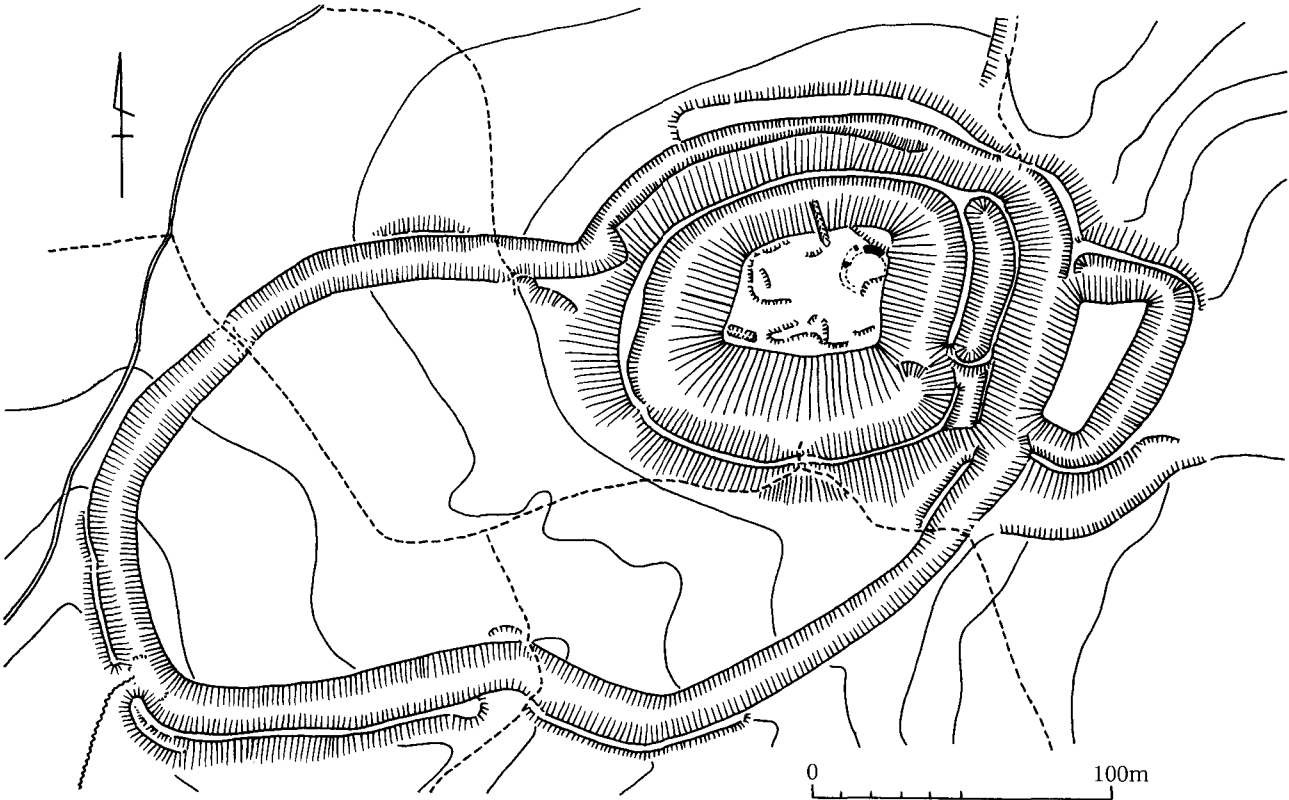
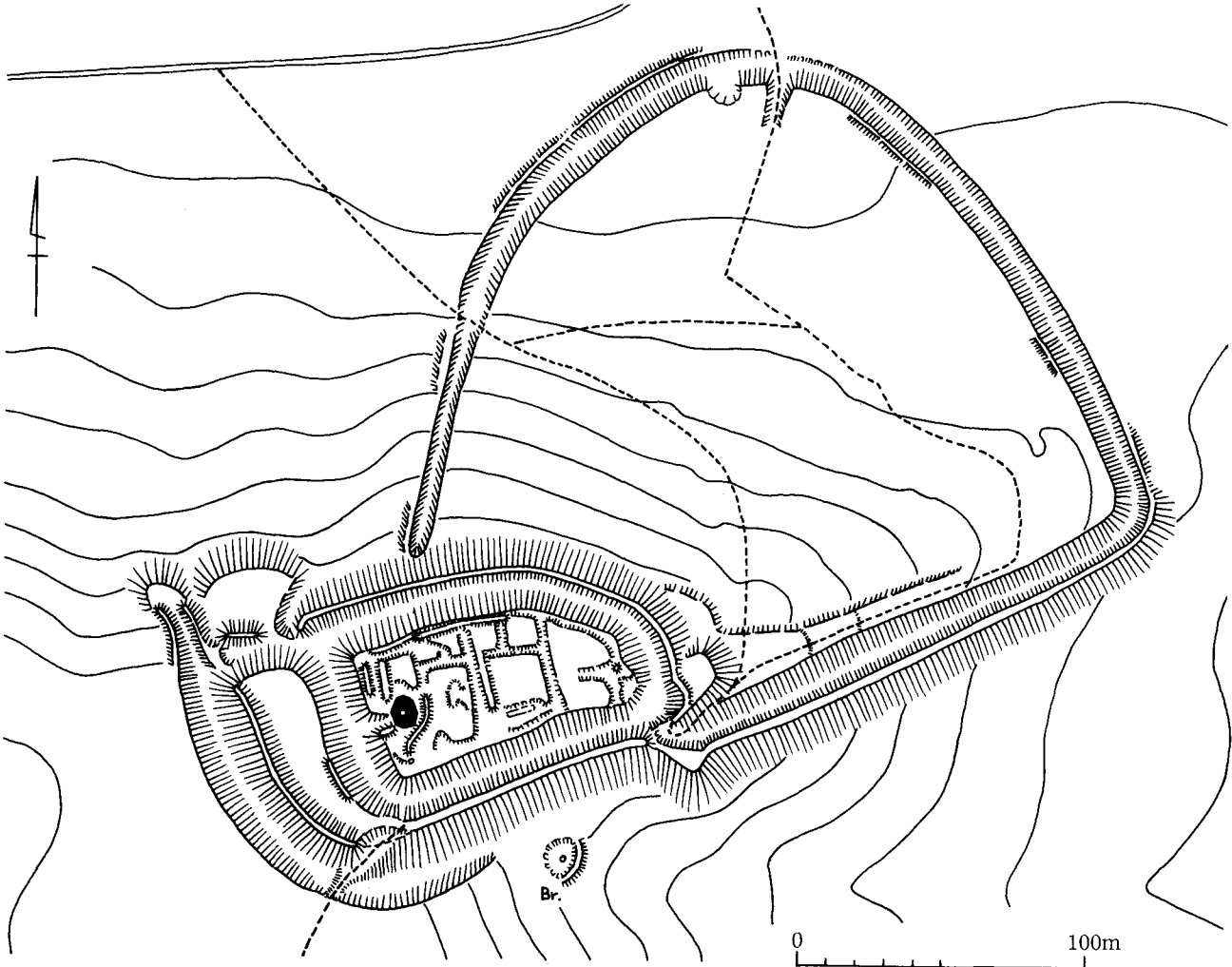
それでは, 本城部分と外郭部分はそれぞれどのような機能を果たしていたのであろう。この問題をさぐるのにもっともよい事例が, ドイツ皇帝の王宮城郭のひとつであったティレダ(Tilleda)であった。ティレダはザクセン-アンハルト州ザンガーハウゼン郡に所在する。旧東ドイツの科学アカデミーのポウル・グリムらが1958年から調査を開始し, 1979年まで発掘を行った〔GRIMM 1968・1990〕。1993年からは発掘成果をもとに建物などの立体復原や堀・石塁の平面表示を行った史跡公園として公開している(図7)。

ティレダ城では, 一部石造りの防御施設を備えた堀と土塁によって防御された城郭部分(実城)に加え, 外側に広大な堀と塀囲みの外郭(前城)を備えていた。外郭も最盛期には石の基礎をもち, 見張り櫓を配した城壁で防御した。そして尾根先端に位置した城郭部には宮殿や教会が建ち, 外郭部分にはさまざまな手工業者の工房と住居が集まっていた。発掘で判明したのは象牙などの角や骨の加工職人, 銅および青銅器職人, 鉄器職人, 土器職人, 機織職人などの活動と集住である。

このように, この城は11世紀後半~12世紀前半のハインリッヒIV世からV世の時代にかけて, 皇帝のもっとも重要な領地となっていたザクセン, とりわけハルツ周辺の王領直轄地経営の拠点のひとつであった。そして発掘成果から明らかのように, 領地からの生産品を集積するとともに, 外郭にさまざまな職人が集住することで, さまざまな産物を加工し, 交易品として流通させるといった初期的な都市機能を果たしていたのである。

ティレダの例からもわかるように, 大規模な外郭部の出現は, 城郭を核とした手工業者の凝集の

▶図6 エンドゼーのアルテスシュロス(上)とノルデンベルグのシュロスビュック(下)
([DANNHEIMER・HERRMANN 1968]所収のIXMEIERとHOLZNERの図をもとに修正して作図)



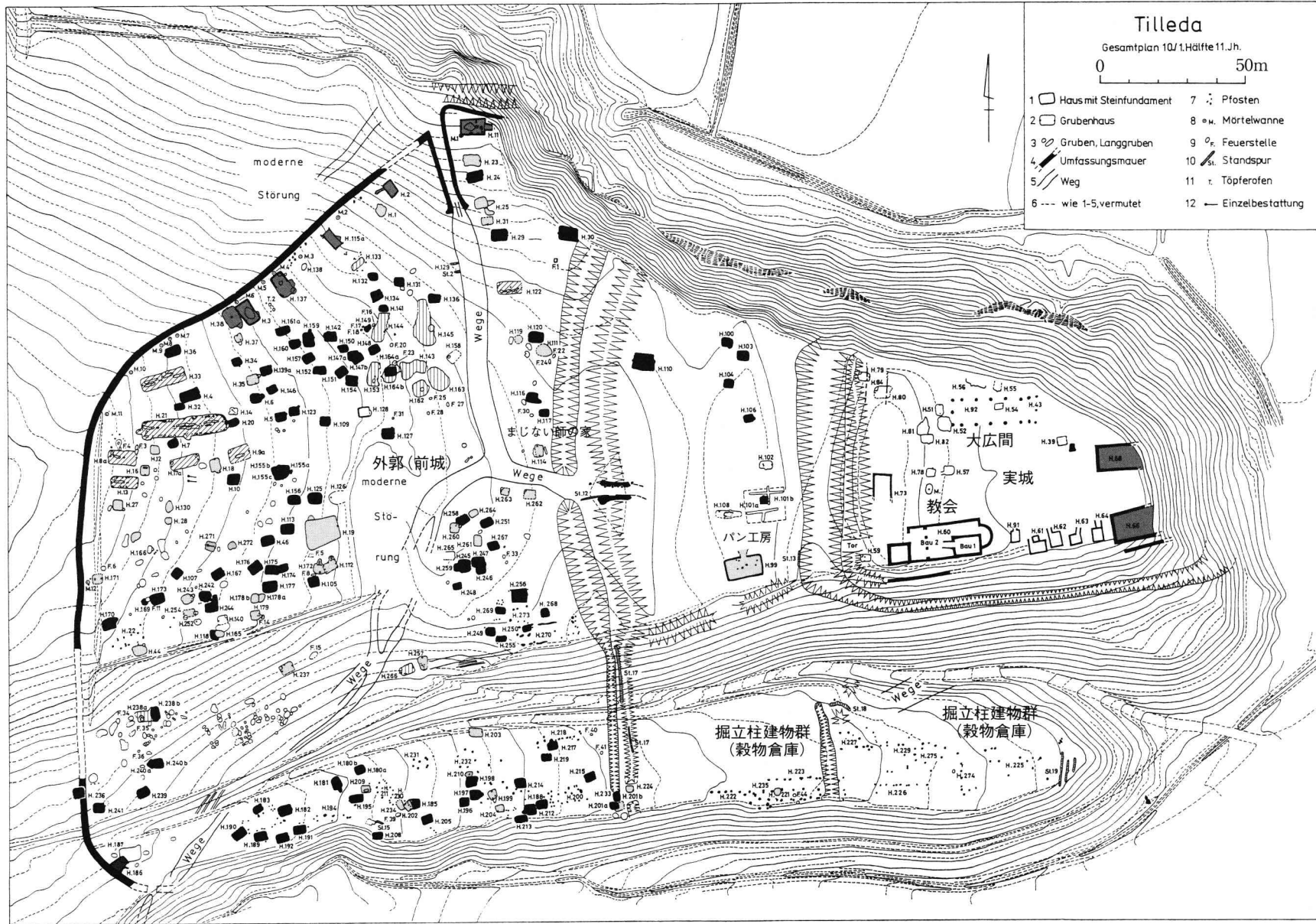


図7 ティレダ城([GRIMM ed. 1990]に加筆)

- 竪穴建物の住居
- ▨ 機織工房
- ▨ 鉄器加工工房
- 石積み基礎の槽
- 竪穴建物の倉庫

ために必要とされたのであった。11世紀～12世紀にかけてのローテンブルク、エンドゼー、ノルデンブルク、インシンゲンの各城郭の外郭部においても、ティレダと同じような都市的機能が萌芽していたに違いない。そうした等質的な都市化の凝集が、エンドゼーで確認したように12世紀半ばにローテンブルクへ集約されることで、地域における中心地・ローテンブルクが成立した、と考えられるのである。

12世紀にローテンブルクの都市域が拡大し、また都市特権を獲得したのも、周辺の初源的な小城郭都市から商工業者が移住して、この地域の都市化競争に勝ち抜いたからであったと分析できる。じじつティレダにおいてもこの前城に集住した職人たちが、後のこの地域における中心地成立の直接の原動力になったことがわかる。1115年に起きた皇帝ハインリッヒV世に対するザクセン諸侯の反乱のため、皇帝はティレダ城より一層軍事的に優位な高山にキーフハウザー城を築いた。この山城は比高が400mを越える山上にあり、実城と前城といった関係で初源的な城郭都市をつくることは不可能であった。ティレダ城も壘壁際の柵を整えるなど、城としての機能を12世紀前半まではもちつづけたが、明らかに軍事拠点としての機能は低下した。

実城の宮殿は寂れ、内部は教会のみが機能し、中庭は墓地に転用された。こうして都市的核を失った外郭の職人たちは、12世紀後半に山を降り、ティレダ城の麓に移住した。そして現在までつづく、当時囲郭を備えた都市ティレダを建設したのであった。このティレダにおける外郭都市を起源とした都市の成立は、ローテンブルク周辺で見たような、都市形成型のインカステラメントの実態を的確に示したものと考えることができる。

ドイツ皇帝の城と一般の諸侯の城との比較ではあるが、当時の領地経営のあり方は皇帝と諸侯において大きな違いはなかった。また実城と外城(前城)の囲郭規模もローテンブルク周辺の城とティレダ城ではほとんど同じであり、比較対象にふさわしいといえる。さらにグリムは、ティレダと同様の大規模外郭を備えた城として、グリムシュレーベン、ヴェルラ、ロッテンブルク、ケウシュベルク、フレックレーベンの各城をあげ、10世紀から12世紀にかけて実城と前城の組み合わせによってできた城が広く成立していたことを明らかにしている [GRIMM 1968]。このほかにも、ザクセン州のオシャツ城、オストロ城などを指摘でき、同時期・同タイプの城郭は枚挙にいとまがない。つまり、ローテンブルク周辺の城もティレダ城も、11～12世紀の城郭の特徴を備えた当該期のごく一般的な城郭と考えてよいのである。

また、ティレダ城の実城に教会があったことにも改めて注意しておきたい。たとえばティレダ城と同じザクセン州にあった皇帝の城、帝国城郭であったドーナ城(Dohna)は、10世紀から12世紀にかけてが盛期で、外郭(前城)に聖ペトリ教会を内包していた。この聖ペトリ教会は単なる城内の教会だけではなく、教区教会として周辺の村々と強い宗教的な絆で結ばれていた [Spehr 1994]。このように当該期の城郭都市は、都市的機能のひとつ、地域の宗教なセンターの役割も果たしたのであった(図8)。

つまり10世紀以降、各地域の拠点となった城郭において外郭が広く構築されるようになり、11世紀には商工業者の凝集と宗教センターを中心とした都市機能が萌芽し、さらに12世紀に入ると、城郭の統廃合を伴いながら、いくつかの小城郭の初源的都市機能を集約して、地域の中核的都市機能を発揮した中心地が現れた、とまとめることができる。こうした中心地形成の一連のプロセスは、



図8 ドーナ城内 聖ペトリ教会(右下)を教区教会とした村([SPEHR 1994]に加筆)

日本における第2次インカステラメントと同じ展開過程と評価できる。これをドイツにおける都市型インカステラメントと位置づけたい。

ドイツの都市型インカステラメントは広く各地で行われたと考えてよい。たとえばフェーリングが東部ドイツにおける中世都市の成立過程を明らかにしたヘルマンの研究を紹介している [FEHRING 1992]。ヘルマンは東部ドイツの9世紀から11世紀にかけて初源的な城郭都市が、その後の12世紀から13世紀の中心地になっていったことを示した。

スラブの影響を強く受けた北・東ドイツにおける11世紀のインカステラメントの典型例は、ベルリンに所在したベルリン-シュパンダウ城である。この城では、前城に数多くの職人と商人の工房・事務所・商店・住居が建ち並んでいたことが発掘で判明している [FEHRING 1996]。まさに初源的な城郭都市の姿である。

こうした中心地成立の背景には、やはり12世紀段階に等質的な小城郭都市機能が競合の結果統廃合され、より高位な中心地機能を発揮し得る都市が成立して行く、都市型インカステラメントの動きがあったと考えられる。

このようにインカステラメントを城を核とした農村の編成といった視点で見た場合、ドイツでは先学が指摘したようにほとんど確認することはできなかったが、日本の第2次の城郭都市形成と同じように、城を核とした商工業者の凝集の動きは広範に行われた、と再評価できるのである。ヨーロッパそして日本でも確認できるインカステラメントの中で、都市型に偏った編成が行われたところに、ドイツのインカステラメントの特色があった、とすることができる。

③……………イギリスにおける城郭集落の形成

1 スウェヴジーの館城復原

ケンブリッジシャー州に位置するスウェヴジーは、現在のはのかな農村である。しかし中世には、近隣に Fen と呼ぶ低湿地が広がり、内陸ではあったがウーズ川水系で各地と結ばれた小規模な港町であった。ケンブリッジとハンチントンとを結ぶローマンロードと水運の接点の微高地という立地が、中世に都市的機能の形成を促したに違いない。

当時、スウェヴジーは北・中央・南の微高地からなっていた [RAVENSDALE 1982]。集落の中心は中央の微高地であった。ここの中心にはマーケットプレイスと呼ぶ市場跡があり、船着き場の痕跡を見ることができる。また中央の微高地の北側のハイストリート (High Street) には、スワンポンドと呼ぶ池が残されており、ここも船着場であったという。これらの船着き場は、運河でウーズ川につながっていた。

スウェヴジー周辺の領主であったリッチモンド伯アラン卿は、1086年にスウェヴジーの所有者になった。記録では1244年に常設市場と定期市の設置が許可された [RAVENSDALE 1984]。現在につづく都市プランの骨格は、この頃にできあがったと考えられる。

1994年と95年にかけて、前川要を中心とした富山大学考古学研究室とケンブリッジ大学考古学部遺跡調査部門が、スウェヴジーの共同調査を実施した [MAEKAWA et al. 1995・前川 1996]。筆者も参加したこの調査成果を手がかりに、イギリスにおける城郭集落形成の検討を進めてみよう。

マーティン モリスの教示によれば、11世紀には中央の島に防御施設が築かれていた可能性が高いという。つまり、この段階には城郭都市になっていたと考えられるのである。しかし従来、中央島にあった防御施設はどのようなものであったのか、本格的に検討されていない。発掘成果を中心に、現地の踏査と1838年製作のエンクロージャーマップを資料として復原を試みる。

スウェヴジーを防御していた堀と土塁は、現在、中央島の中でも特に城郭遺跡と認識されているブラックホースレーンとアメンコーナーでよく観察できる（図9）。また1984年の発掘によって中央島南側で堀が2カ所確認されている [HAIGH 1984]。これらと先述した一連の資料から、ある時期に自然の低地を利用しながら、中央島の周囲に防御施設が設けられていたことは確実である。

しかしブラックホースレーンおよびアメンコーナーの集落側（東側）に堀や土塁があったかどうかは、従来は問題にされておらず、スウェヴジーの集落プランの検討をむつかしくしてきた。中央島全体が防御施設に均一に守られていただけなのか、もしくは中央島の西に核となる城郭があったのか、また、城郭があったとすればどのようなプランであったのだろうか。

現況では、ブラックホースレーンの西端の堀と土塁は確認できるが、南北と東側の堀や土塁がどうなっていたかははっきりしない。アメンコーナーでは、西から北にかけて堀と土塁が見られるが、さらに東や南に堀や土塁がまわって独立した曲輪であったか不明である。

ブラックホースレーンのまわりの堀の有無を知る鍵は、ブラックホースレーンとアメンコーナーの間を通過して西側からスウェヴジーに出入りする道・テイラーズレーンの北脇に残された堀の痕跡が握っている。この堀は現況のテイラーズライン道と重なりながら約50m程、痕跡が確認され、東端で南側に折れる様相を見せている。

このことから集落全体を囲郭した堀が、この部分では集落側に大きく入り込んでおり、ブラックホースレーンかアメンコーナーのいずれかが四周を堀で囲まれていたことが、まずわかる。この堀がアメンコーナーのものであった場合、アメンコーナーを東側で限る堀といずれかで結びつかなくてはならない。

それではアメンコーナー東側の堀はあったのか。東側の堀の最も有力な推定位置は、エンクロージャーマップに示された Home Close・地番31の土地と東隣の地番29の土地を分ける地境である（図9左・矢印のライン）。この部分は1990年にケンブリッジ大学考古調査部が発掘を行い、確かに溝を発見しているが、19-20世紀のものと結論づけている [EVANS 1990]。このことよりテイラーズレーン北側の堀と結びつくアメンコーナー側の堀はない、といえる。

残された可能性はテイラーズレーン北側の堀がブラックホースレーンをとりまく堀の一辺であったことである。そう仮定すると堀の東端が南側へ曲がっていることと矛盾が生じない。また現在確認できるブラックホースレーンの北西端の堀と土塁のラインにこのテイラーズライン道北の堀を無理なくつなぐことができる。

そして現在のブラックホースレーンの道とブラックホースレーン道から枝分かれして工場との間を東西に抜ける小道の区画をつないで、南北150m×東西120mの曲輪を想定することが可能になる。つまり中央島の核として、ブラックホースレーンに堀で守られた矩形の館城があり、北側に隣接して集落側には堀や土塁などの囲郭はもたないが、フィッシュポンドなど城にかかわる施設がつけられたアメンコーナーがあった、と復原できる。

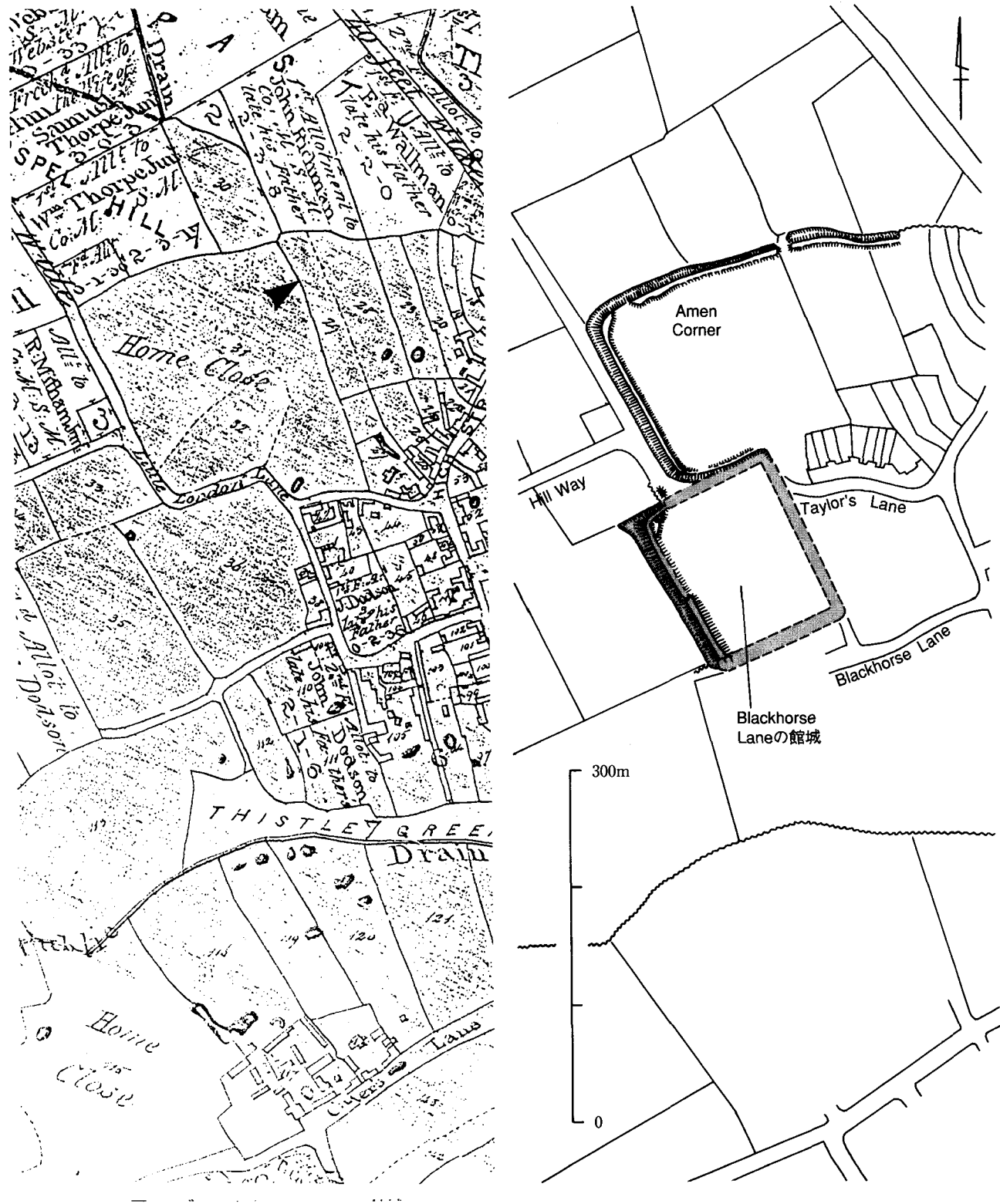


図9 ブラックホースレーンの館城
(左 ケンブリッジシャー州公文書館蔵 1838年製作のエンクロージャーマップ
右 遺構復原 1994年現地調査による)

2 地域の村落動向と
スウェヴジー

集落の核に城郭をもったスウェヴジーのあり方は、周辺の集落と比べてどのような特色を持っていたのであろう。ケンブリッジシャーの中世城郭と廃村遺跡については、これまで Salzman, Royal Commission, Brown と Taylor, Cambridge Archaeology Field Group などの調査と研究によって多くのことが判明している。

その結果、この地域にはきわめて濃密に小中規模の城郭遺跡が分布し、城郭を核にした中世の村がいくつも存在したことがわかる。また村そのものの遺構を地表面で見ることができなくても、畑地や牧草地のなかに城郭遺跡が取り残されているものを、頻繁に観察できる。これらも、もともと城郭を核として、耕作地に近接した小規模で散在的な村落を形成していた表象と理解できる(図10)。

村落形成の核となった城郭は、イギリスでもひとつの村落に1城とは限らなかったのである。ひとつの村落に3城郭～4城郭といったものも、ごく普通に見られた。日本の畿内地域の村落にも、こうした例は多く確認できる。日本の場合、そうした村の中にいくつもの城郭が残された理由は、小領主側が一族や有力な上層農民を、館を築ける層として取り込みながら(別言すれば村落上層の意志と選択の結果によって)、村落型インカステラメントを行って集落をつくっていった痕跡であった[千田 1991b]。ケンブリッジシャーの事例も同じ現象と、とらえてよい。

またスウェヴジーの周辺地域では、城を核とした凝集的な集落の痕跡だけでなく、修道院を核とした集落跡も展開しており、城のほかには教会も凝集核として機能したといえる。つまり、これら濃密な中世の廃村遺跡の存在は、小規模な城郭集落間に複雑な移転・統合の歴史があったことを示すとともに、そうした競合が、村落間あるいは都市-村落間だけではなく、同一集落内の小規模城館を核とした村内の小集落間にも働いたことを物語る。

スウェヴジーの場合、中央の微高地から約1000m離れた南の微高地に、中世の廃村遺跡がある。集落の形態は、同じケンブリッジシャー州の著名な中世廃村遺跡ワーラムパーシーと酷似しており[BERERSFORD・HURST 1990]、12世紀半ば以降に成立したと考えられる。一段掘り窪めた道路に間口の狭く奥行きが長い敷地をもった家屋が並んだ景観で、家屋背後の細長い区画は耕地として利用した。このスウェヴジーの廃村遺跡については1995年にスウェヴジープロジェクトが電気探査などによる調査を行って建物の配置状況などを分析した[前川・酒井ほか 1996]。

この村の廃絶原因を示す直接の資料はないが、周辺の中世集落の動向と合わせて考えると、13世紀以降、常設市場を設置した城郭都市スウェヴジーの中心地機能の強化によって、中央微高地の集落に吸引された可能性がきわめて高いと考えられる。ちょうど日本の清須城下町の成立と、周辺村落の廃絶と同じ現象といえることができるだろう。

スウェヴジーの南5kmに位置するボックスワース集落(Boxworth)のオーバーホールグロブ城(Overhall Grove)は一辺50mの中心の館をもち、さらにその周囲に一辺100mの囲郭をもった(図11)。11世紀以降にここを領地としたボックスワース家の拠点であった。1984年に遺跡を南北縦断した調査が行われ、この地域に濃密に分布する城郭の築造年代を考える手がかりを提供した。この調査では12世紀から13世紀の遺物が多く発見されており[MAY 1991]、この時期から14世紀にかけて城郭と周囲に凝集した集落が活発に活動したことが確認できる[TAYLOR 1997]。

こうしたスウェヴジーの周辺に分布し同時期に機能していた城郭と比較して、スウェヴジーのブラックホースレーンの城は、特別なプランではないことがわかる。12世紀以降に、この地域に広範

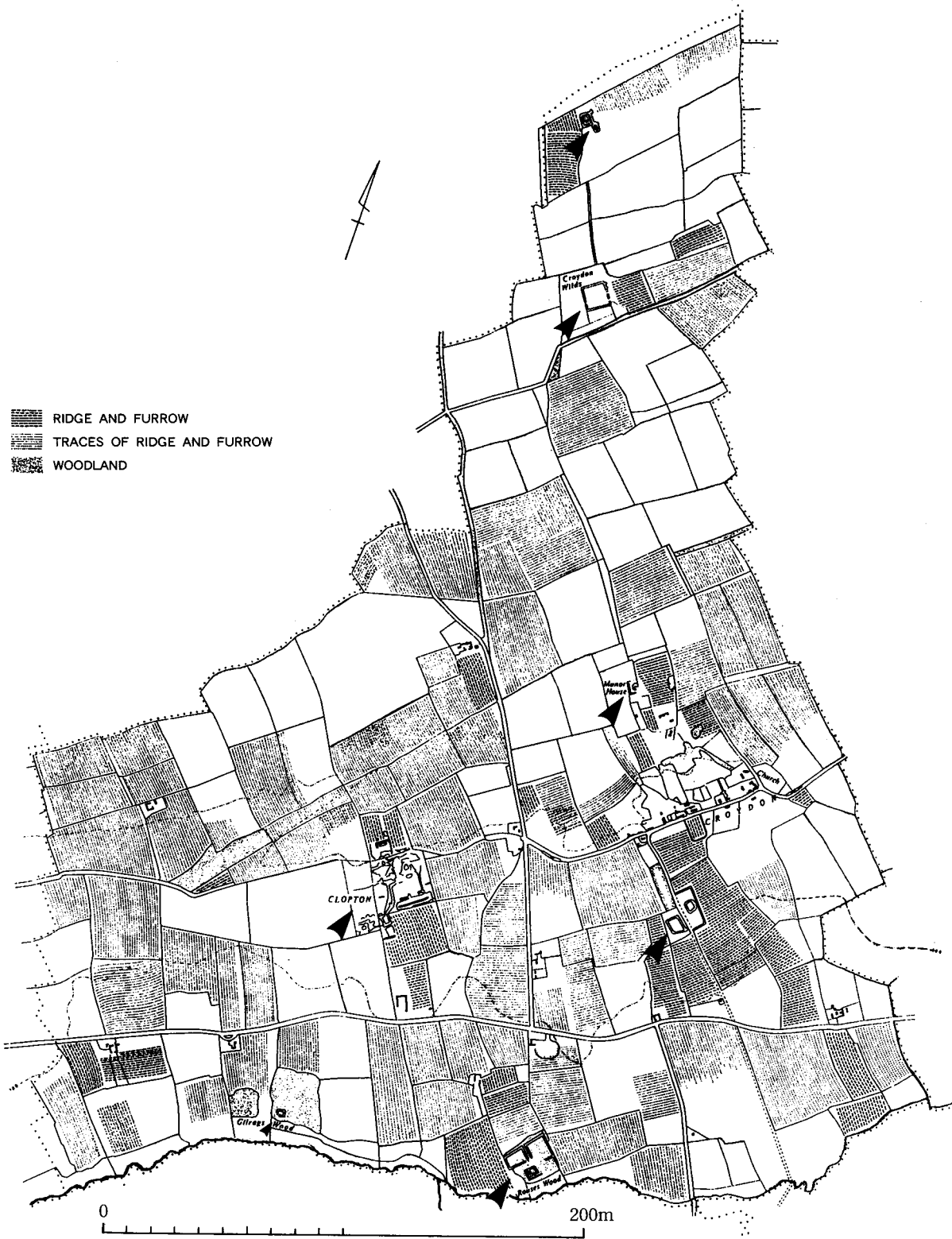


図10 ケンブリッジシャー州クロイドン村に残る中世城館(矢印が館跡 [RCHM 1972]に加筆)

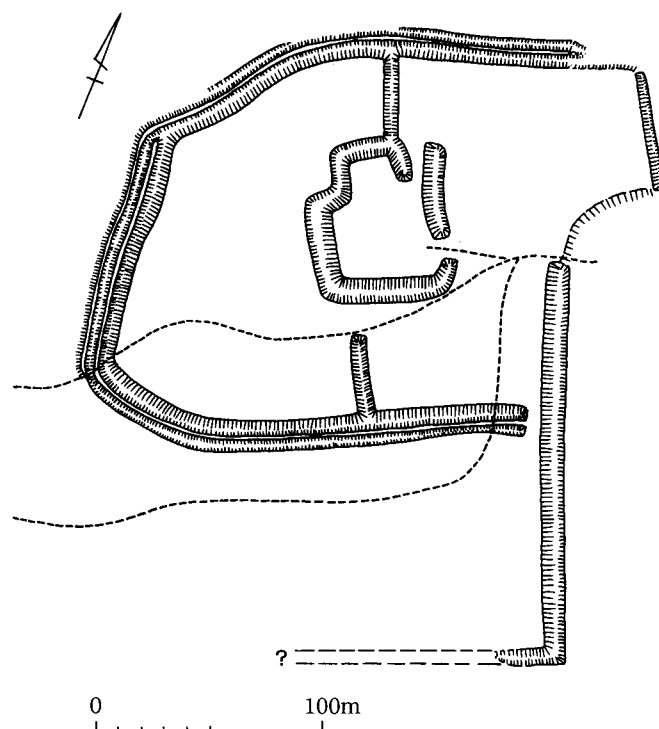


図11 オーバーホール グローブ城([MAY 1991]より)

に行われた城を核とした凝集的な集落形成・インカステラメントであったのである。

スウェヴジーは1086年に編纂された the Domesday Book によれば、すでに規模の大きな荘園で、周辺村落のなかでは中心的な機能をもったことが推測できる。ウーズ川水系の水路を利用した流通の結節点であったスウェヴジーは、ハイストリートに面したドック跡であるスワンポンドやマーケットプレイスのドックに見るように、早くから物資の集散とそれに関わる商人や職人が集まったところであった。

だからスウェヴジーは13世紀の常設店舗の許可以前であっても、周辺の村落とは性格を異にした都市型インカステラメントであったといえる。こうした背景から、中央微高地全体の囲郭も、ノルマンコンクエストのウイリアム征服王による Ely 攻略をめぐる戦いの中で、スウェヴジーに城郭が築かれた11世紀段階まで、遡ったのかもしれない。

ただし、スウェヴジーのその後の歩みは決して平板ではなかった。1143年の Ely をめぐる Fen 地域の内乱では、スウェヴジーではなく、同じウーズ川南岸で東へ16km 離れたパウエル (Burwell) と、6 km 離れたランプトン (Rampton · Giant's Hill) が戦略上の要地として認められ、拠点城郭が築かれた。現在確認できるスウェヴジーの防御遺構と比較すると、ふたつの城は、はるかに進んだ防御施設といえる (図12)。しかしスウェヴジーにとってより問題だったのは、防御施設の強固さではなく、新しい城館を核とした競合する集落の出現であった。

パウエルにはもともと集落形成の核になっていた古くからの館城があったから、もともとごく一般的な城館集落であったと見てよい。しかし乱を契機に重要拠点となったことで、強力な中心核と

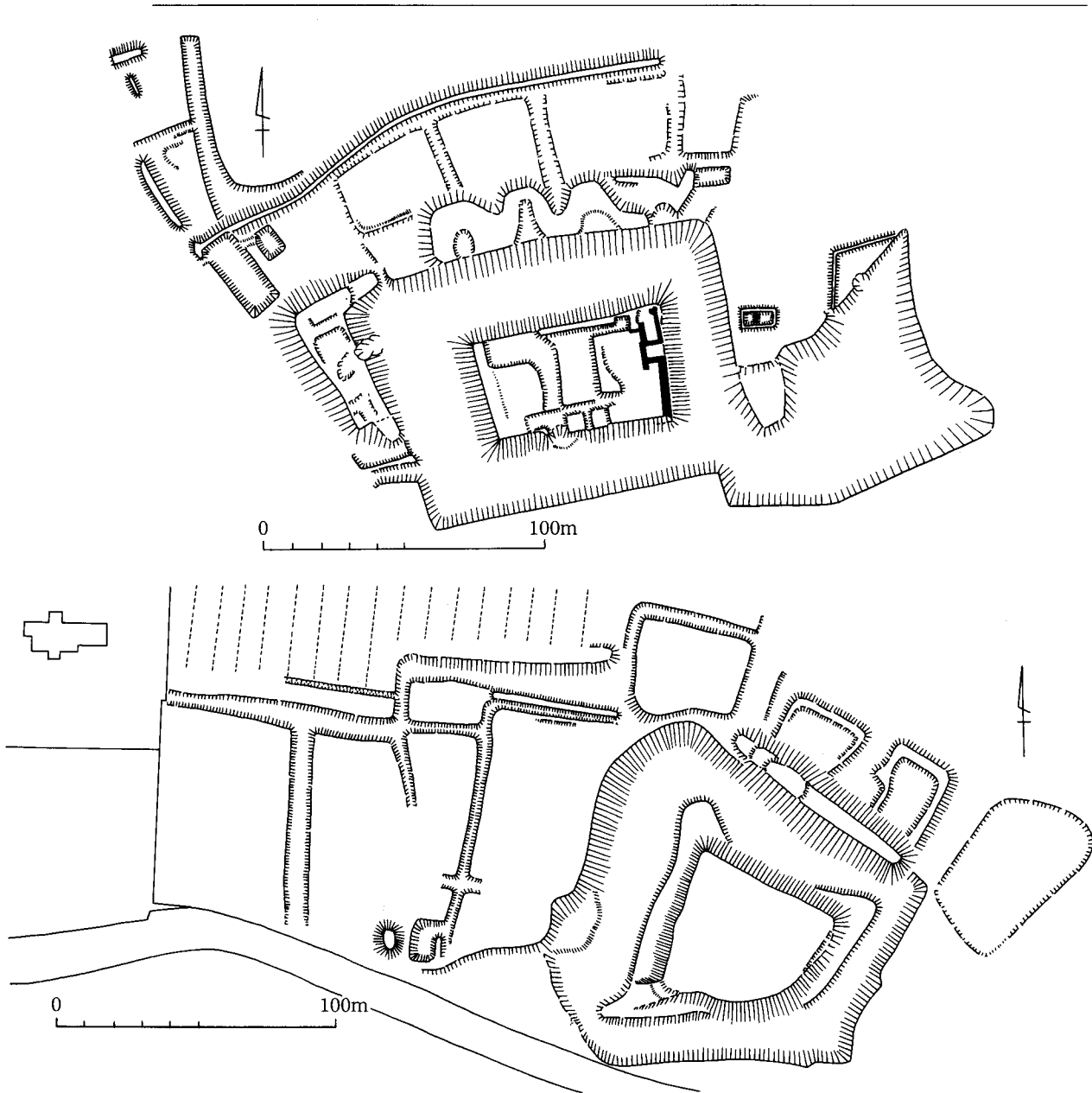


図12 バウエル城(上)とランプトンのジャイアンツヒル城
([RCHM 1972]所収図を参照して作図)

して機能し得る大型城郭が築かれたのである。スウェヴジーと同じく運河によって水運網につながったバウエルは、12世紀には石造の教会を整えたことが現存する建物から確認できる。

さらに、街道に沿った屋敷には現在も16世紀後半以降の家屋が建ち並ぶように、長きにわたって水運の拠点として重要な位置を占めるに至ったのである。城といわゆる横町の関係にあたる全長2 kmにもおよんだ家並みは、地域における中心地機能の大きさを推測させる。もちろんこうした中心地機能をめぐる競合は、ふたつの集落間だけではなく、周囲の小規模城郭都市間で多面的に展開

したのであった。

やはりここでも、地域内の、より高次の中心地機能を発揮していこうとするいくつかの動きを観察することができたわけで、スウェヴジーも、そうした競争を勝ち抜くためにも都市施設を充実させていったのであった。痕跡をとどめるドックや水路の整備も、そうした背景の中で評価すべきであろう。そうした活動は都市領主の意図だけではなく都市住民にとっても望ましい選択であったに違いない。しかし最終的には、この地域の中心地機能は、スウェヴジーの北3kmのウーズ川に沿ったセント アイブス (St. Ives) が集約したことで、スウェヴジーの中心地機能は、その大きな役割を終えたのである。

④……………城郭都市形成の歴史的位

日本とヨーロッパの中世において、城郭を核とした集落の形成がどのような意味をもったか、比較検討してきた。この結果、城郭を核にした凝集的な集落の形成は共通して見られたものの、そのあり方はそれぞれにおいて特色をもったものであったことを明らかにできた。

そうした集落形成をインカステラメントとして同じ視点から分析すると、日本とイギリスの場合は、村落型インカステラメントと都市型インカステラメントが行われたのに対し、ドイツにおいては都市型に偏った運動として起こったことを示した。こうした点に、日本中世の城郭集落形成の基本的な構造が表れている。そして、ヨーロッパと比較して、近世城下町というもっとも貫徹した姿でインカステラメントを17世紀初頭に列島規模で行ったことに、最大の特色をもつと評価できる。

一方、ヨーロッパに目を向ければ、従来、アルプス以北でのインカステラメントが微弱であった、という評価を受けてきたのは、本稿が検討してきた土づくりの最終段階の城郭に関する研究が、考古学と歴史学の研究の狭間で相対的に遅れてきたからにはほかならない。

こうしたヨーロッパの土づくりの城郭の検討には、日本の考古学的な城郭研究の視点や分析方法がきわめて有効である。さらにドイツやイギリスにおいても、立ち後れていた当該期の城郭研究が近年本格的に進められており [BOME ed. 1991, RCHAM WALES 1991]、今後、本稿に示したようにアルプス以北のインカステラメントの評価も、見直しが進むと思われる。

いくつかの城郭都市の廃絶と、新しいより大きな都市の成立という中心地の移動は、日本でもヨーロッパでも等しく観察できた。ヨーロッパでは11～12世紀に出現した城郭都市は、12世紀から13世紀に成立していった近接する中世都市の母体であった。新たに成立した都市は、いくつかの城郭都市の都市機能を吸収・統合したことによって、より高次の中心地機能を発揮し得たのである。このように城郭都市の廃絶と中心地の移動を、経済的競争と合理性から説明できる。

しかし城郭都市の発掘成果は、そうした経済的要因だけではない別の大きな理由を読みとることができる。それは都市住民の意志・選択の視点である。13世紀以降のヨーロッパ中世都市は、市民上層を核とした商人ギルド (同業者組合) を中心に、全市民が参加した誓約共同体のコミュニケーション運動によって、皇帝・諸侯・司教による都市領主制を打破して、しだいに自治を獲得していった。最古のコミュニケーションの成立は、1112年のケルンという。

さらに14世紀には手工業者のギルド (ツunft) から市参事会に参加するための闘争が各地で行

われた。そしてついに参事会にツフトの代表者が議席をもつか、あるいはツフトの代表者を含んだ大参事会が結成されるようになった。これが徹底した場合には、参事会はすべてツフトの代表によって担われた。

このように12世紀以降の中世都市は、自治権をもつ共同体によって都市が担われ、さらに都市制度の民主化を推進する方向に展開した。もちろんコミュン運動は、反封建を原則にしたものではなく、封建制のなかでの自治権獲得運動であった。共同体による自治を、中世都市の必須要件とすべきではなくなっているが、自治と自由を求める都市住民の意思は、一貫した大きな特色であった。リュベックなどの発掘調査によって明らかになった街路に沿って建ち並ぶ商家・工房、ケルンのように市民の力によって構築した市壁は、そうした意志と力を示す。

これに対し、ティレグ城の発掘成果は、空間構成として城郭都市の外郭（前城）に集住した商職人たちが、強く城主（都市領主）の支配権に従属していたことを明確にする。つまり城郭都市は12世紀には、明らかに商職人らの都市住民の意識や選択にそぐわないものになっていたのである。ここに歴史的に見れば城郭都市が過渡的な役割に留まった理由を、見いだすことができる。

中世の城郭都市がもった過渡的な性格は、たとえば日本の弥生時代の大型環濠集落の動向とも一致して、きわめて興味深い。都出比呂志は、世界的な検討から大型環濠集落の段階を「城塞集落」とし、国家形成前段階の集団間の政治的な緊張が高まり、それに備えて集落を防御したもので、長期間存続しないことに特色があるとした〔都出 1997〕。

もとより弥生時代と中世をそのまま比較することはできないが、中央国家権力の弱体化と地域小国家の分立と抗争の状態にあった中世は、国家体制の再形成の段階であり、歴史的背景としては類似した時代といってよい。ただし中世における城郭集落の変遷は先述したように、より時代に適応した地域における中心地を形成する過程を示したものであり、そこにはもちろん権力者側の強い意志も働いていたが、同時に住民側の選択があったのである。そこに弥生時代と中世都市との形成要因の違いを指摘できる。

日本の場合、大型環濠集落以降、古墳時代を経て成立した古代都城においても、条坊に区切られた町の四周は塀で囲まれており、商職人の従属的性格がなお強かった。平安京で、町の塀や欄が破られ、街路に面した短冊形の屋敷地割をもつ町屋が出現してくるのは、12世紀を待たなくてはならない。

そうした変遷を経た後の集落編成が、13世紀以降の村落型インカステラメントと、さらには15世紀以降の都市型インカステラメントを広く基礎としたものであった。16世紀には畿内の堺や京都を筆頭に、都市において豊かな町共同体が成立した。しかし織豊政権が上からの平和を達成し、領主層の錯綜性を止揚し、自らを公儀と位置づけることに成功したことによって〔仁木 1997〕、町共同体は城下町の支配基盤として取り込まれていった。

町を囲んだ塀を崩して成立した短冊形の屋敷地割りも近世城下町では、長方形街区のなかに整然と収容されて、城下支配の単位となった。もちろんそうした都市が都市住民の意思と選択にも合致したからこそ、近世城下町が成立したことはまちがいない。しかし城郭を頂点とした都市プランの完全な求心構造は、領主主導によって担われた部分がきわめて大きかったことを示すといえよう。

こうして13世紀以来の日本のインカステラメントを貫徹・徹底する形で、現在につづく列島の主要都市を形成したことに、日本における城郭集落形成の特質と深さを指摘できるのである。

参考文献

- ANTONOW, Alexander 1993, PLANUNG UND BAU VON BURGEN, Alexander Antonow Verlag, Frankfurt am Main.
- BERESFORD, Maurice·HURST, John 1990, WHARRAM PERCY Deserted Medieval Village, Batsford/English Heritage, London.
- BOHME, Horst Wolfgang (ed.) 1991, BURGEN DER SALIERZEIT, Teil 1/2 Römisch-Germanisches Zentralmuseum, Jan Thorbecke Verlag, Sigmaringen.
- EVANS, Christopher 1990, ARCHAEOLOGICAL INVESTIGATIONS AT SWAVESEY, Cambridge Archaeological Unit, Cambridge.
- FEHRING, Günter P. 1992, EINFÜHRUNG IN DIE ARCHÄOLOGIE DES MITTELALTERS, (2nd ed.) Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt.
- 1996, STADTARCHAOLOGIE IN DEUTSCHLAND, Archäologie in Deutschland Sonderheft, Konrad Theiss Verlag, Stuttgart, pp.25-26.
- FRANCOVICH, Riccardo · Guideri Silvia et al. 1995, ROCCA SAN SILVESTRO, Università Degli Studi Siena, Siena.
- FRIEDRICH, Krahe 1994, BURGEN DES DEUTSCHEN MITTELALTERS GRUNDRIS-LEXIKON, Weldlich, Würzburg.
- GRIMM, Paul ed. 1968, TILLEDA Teil 1: Die Hauptburg, Akademie Verlag, Berlin.
- ed. 1990, TILLEDA Teil 2: Die Vorburg und Zusammenfassung, Akademie Verlag, Berlin.
- HAIGH David 1984, EXCAVATION OF THE TOWN DITCH AT SWAVESEY, 1984, P.C.A.S. vol. 73, Cambridge.
- DANNHEIMER, Hermann·HERRMANN, Fritz-Rudolf 1968, ROTHENBURG o. T., Katalog zur Vor und Frühgeschichte in Stadt und Landkreis, Verlag Michael Lasseben Kallmunz OPF, München.
- MAEKAWA, Kaname·SAKAI, Hideo et al. 1995, SWAVESEY 1994, The Swavesey project, Cambridge.
- MAY, Susan C.·Cambridge Archaeology Field Group 1991, Three Earthwork Surveys, Proceedings of the Cambridge Antiquarian Society, 81, pp. 39-49.
- PIPER, Otto 1912, BURGENKUNDE, Piper & Co, München (Weltbild Verlag 1993, Würzburg).
- RCAM WALES 1991, THE EARLY CASTLES, HMSO., London.
- RCHM 1972, THE INVENTORY OF THE ANCIENT AND HISTORICAL MONUMENTS IN NORTH - EAST CAMBRIDGE-SHIRE, H. M. S. O., London.
- SPEHR, Von Reinhard 1994, Christianisierung und früheste Kirchenorganisation in der Mark Meisen, FRUHE KIRCHEN IN SACHSEN, Veröffentlichungen des Landesamtes für Archäologie mit Landesmuseum für Vorgeschichte Band 23, pp. 9-63, Konrad Theiss Verlag, Stuttgart.
- TAYLOR, Alison 1997, ARCHAEOLOGY OF CAMBRIDGESHIRE, Vol.1, Cambridgeshire County Council.
- TOUBERT, Pierre 1973, Les structures du Latium médiéval, Le Latium méridional et la Sabine du IXe siècle à la fin du XIIe siècle.
- 上村喜久子 1979「中世尾張の「村」について」『名古屋博物館研究紀要』2, pp.1-14, 名古屋博物館。
- 大類 伸・鳥羽正雄 1936『日本城郭史』(再版 雄山閣 1960)。
- 小野正敏 1995「出土陶磁器が語るもの」『よみがえる笹本城跡』東総文化財センター。
- 加藤安信 1990『森南遺跡』甚時町教育委員会。
- 城戸照子 1990「10～13世紀南欧社会の城と定住」『史学雑誌』第99巻6号, pp.65-82。
- 1995「インカステラメント・集村化・都市」服部良久ほか編『西欧中世史』中巻, ミネルヴァ書房, pp.129-150。
- 木戸雅寿 1992「水辺の集落の原風景」『湖の国の歴史を読む』新人物往来社, pp.140-174。
- 金田章裕 1985『糸里と村落の歴史地理学的研究』大明堂。
- 1993『微地形と中世村落』吉川弘文館。
- 古賀信幸 1994「守護大名大内氏の居館跡と城下山口」前川 要ほか編『守護所から戦国城下へ』名著出版, pp.171-198。
- 小島道裕・千田嘉博 1994「城と都市」『岩波講座日本通史』第10巻中世4, pp.195-232。
- 河野史郎 1996『姉川城跡』神埼町教育委員会。
- 小林 元 1980『矢田川物語』愛知県郷土資料刊行会。
- 佐藤公保 1989「清須周辺の中世村落」『清須・研究報告編』東海埋蔵文化財研究会, pp.3-11。
- 鯖田豊之 1984『ヨーロッパ封建都市』講談社学術文庫1156, 講談社。
- 水津一朗 1976『ヨーロッパ村落研究』地人書房。
- 千田嘉博 1991a「城郭研究の構想」石井進ほか編『中世の城と考古学』新人物往来社, pp.21-52。
- 1991b「村の城郭をめぐる五つのモデル」『中世史研究』第16号, 中世史研究会, pp.103-126。
- 1994「守護所から戦国期拠点城郭へ」『文化財学論集』奈良大学文化財学論集刊行会, pp.457-468。
- 1996「近世大名と領国支配」『考古学による日本歴史』第5巻・政治, 雄山閣, pp.89-104。
- 高田 徹・内堀信雄 1994「美濃における15・16世紀代の守護所の変遷」前川 要ほか編『守護所から戦国城下へ』名著出版, pp.109-140。
- 都出比呂志 1997「都市の形成と戦争」『考古学研究』第44巻2号, pp.41-57。
- 東総文化財センター 1995『よみがえる笹本城跡』
-

- 仁木 宏 1997『空間・公・共同体』青木書店。
原口正三 1977「古代・中世の集落」『考古学研究』第23巻第4号, pp.16-23。
広瀬和雄 1985「中世への胎動」『岩波講座日本考古学』第6巻, pp.296-356。
前川 要 1991『都市考古学の研究』柏書房。
前川 要・酒井英男ほか 1996「英国スウェヴジー遺跡第2次調査における遺跡探査」『遺跡探査ニュースレター』第17号, 文部省科学研究費補助金重点領域・遺跡探査, pp.2-17。
村田修三 1979「城跡調査と戦国史研究」日本史研究会大会報告, 1980『日本史研究』第211号, pp.82-106。
村田修三編 1987『図説中世城郭事典』第1～第3巻, 新人物往来社。
宮武正登 1995「佐賀平野の村と館」網野善彦・石井進編『中世の風景を読む』第7巻, 新人物往来社, pp.54-103。

(1997年3月5日脱稿, 1998年2月補筆)

[謝 辞]

ドイツでの研究の機会を整えて下さった佐原真氏にまず, 感謝したい。そして1995年と97年のドイツ滞在において, 親身の指導を賜ったドイツ考古学研究所 ローマ・ゲルマン研究部のエックハルト シューベルト博士と, ヴェストファーレン州文化財保護局のアンナ-ヘレナ シューベルト氏に心から御礼を申し上げます。

またイギリスへの関心と現地調査には, スウェヴジープロジェクトにお誘いいただいた前川 要氏のお計らいなしにはできなかった。また前川氏にはイタリアの資料をはじめ数々の助言を賜ったことをあわせて感謝したい。

An dieser Stelle möchte ich mich besonders bei Frau Anna Helena und Herrn Dr. E. Schubert (RGK) für ihre freundliche Führung und Hilfe bedanken.

本稿は1994年度の文部省在外研究の成果の一部, ならびに富山大学とケンブリッジ大学考古学部の共同調査であるスウェヴジープロジェクトの成果の一部を含む。

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

A Formation of a Medieval Castle Town: A Comparative Study on the "Incastellamento" in Japan and Europe

SENDA, Yoshihiro

Archaeological studies have demonstrated that a rural settlement started to centralize in various regions of Japan in the thirteenth century and thereafter. The settlement analysis has conventionally focused on the settlement distribution, and neglected the spatial relationship with the adjacent castles. This study stresses that the castle structure is the key to understanding the centralization of Japanese rural settlement in the sixteenth century.

The centralization of rural settlement along the castle is seen not only in Japan but also in the eleventh century of Europe. Toubert first recognized this phenomenon and named it as "incastellamento". In his study, this settlement reformation was only found in the south of the Alps and not apparent in the north. This paper reanalyzes the European studies based on the field survey in Germany and Britain, and aims to clarify the idiosyncrasies of Japanese and European incastellamento.

Based on the analysis of Japanese settlement formation, the study identifies two types of incastellamento, rural and urban. In Japan, the rural-type of incastellamento occurred first, followed by the urban-type. In Germany, only the urban-type of incastellamento was found, whereas in Britain, both types of incastellamento occurred as is in Japan. In Germany and Britain, the reanalysis of the earth-and-timber castles in the eleventh century points out that the outer bailey functioned as an incipient urban center.

Japanese historical settlement studies have traditionally dichotomized urban and rural areas. This study proposes a more integrative approach to the settlement analysis by focusing on the formation of regional cores in a broad, regional perspective.